

蓼食う虫も好きずき

～学問とポルノグラフィの共通点

多面体をある方向から見れば

経済学部教員の多くは経済学者ですが、そうでない人もいます。経済学の関心の対象は高校までの科目でいえば社会科に近いのですが、経済現象から物理や化学のような一般的な法則を見出して数学的論理として表現することも重視しています。ですから（語弊はありますが）経済学者には社会と数学の2科目の素養が要るようです。しかし経済学部の中には、どちらか片方だけの専門家という教員もいて、経済史家である僕もその一人です。

たとえば職場、部活動、家族で「次は何をしようか」と考えることがありますよね。そのときに人間（顧客、部員、子どもなど）の一般的な行動原理に答えを求めることもあれば、それまでの経験・経緯に解決を頼ることもあります。この2つをうまく組みあわせるのが大事なのは、身の回

菅 一城

Ikki Suge

【研究テーマ】

近現代イギリス社会経済史・都市史



りの問題も経済学も同じですが、学問としての経済学は一般的な法則性の研究を核にして成り立ち、歴史的経緯は経済史が分担しています。もちろん理論的な法則は過去にも通用するし、歴史研究が一般的な法則を実証することもあります。考え方のスタイルが違うといえましょうか。

ですから、学生に「先生によって物事の考え方が違うので困る」と言われても、「そういうものです」と答えるしかありません。しかし、実際に教員になってみると、経済史家というのは少し面倒な職業です。経済学者でないのに経済学部しか居場所がありません。生涯の職場なのですが、居候のような気分が抜けません。

ノーマル／アブノーマルは誰が決める？

こういう感覚は洋の東西を問わず共通のようですが、留学したイギリスでの恩師は次のように言っていました。「伏せてあるものをわざわざ覗き見る点で、学問とポルノグラフィは似ている。探求欲も欲なので好みや趣味がある。抽象的な数理や統計的検証を愛する経済学者は、生身の異性の姿よりも、ヘンリー・ムーア（*1）の流線型の彫刻やスリーサイズの数値に興奮を覚える変態に近い。しかし、経済史家が年月日や人名にこだわるのも、異性のあられない姿に浮かぶシワ一つに執着する変態のようだ。変態

*1 【ヘンリー・ムーア】 1898～1986年。イギリス生まれの彫刻界の巨匠。自然のモチーフを連想させる半抽象的な人体像彫刻は、現代の人体彫刻に強い影響を与えたとされる。アサヒビール大山崎山荘美術館のコレクションにも所蔵されている。



が自分の趣味を棚に上げて相手を変態呼ばわりしても仕方ないのだ」

実は、恩師の話のオチは思い出せません。英国王立歴史学協会の会長を務める重鎮なので、学問の枠組みを越えて広い見識を持つように、日本から来た若き歴史家に諭していたのかもしれませんが。しかし、その人柄を思い返すと、この話はただの居直りのような気がします、つまり、学問の世界の外から見ればどちらも変態、学問とはそういうものだ、出口を求めたいならば我らの世界の外に求めよ、と。

同志社の経済学部には現在、経済学史と経済史で計4人のイギリス史家がいます。日本経済が直面する課題について日々ニュースが飛び交うというのに、昔のよその国の研究をするのだから、やっぱり変態です。ただし経済学はイギリス生まれの学問なので、経済学史の先生がイギリスの研究をするのは実は正常です。イギリスはかつて大英帝国として世界経済の中心だったので、これも研究テーマとして正常です。僕の場合は、繁栄の絶頂を過ぎたイギリスで地方都市が衰退し、人々が首都ロンドンに集まって、どのような問題が生じたのかに関心があり、この後半部分がニュータウン政策に関する博士論文になりました。しかし、ロンドン周辺の新興住宅地はよくない評判も多いこともあって、イギリス人にも「ヘンなことを研究しているね」とよく言われます。

世界観が変わった瞬間の感動を胸に

僕は神奈川県の古い町の出身です。小さな山と谷戸に囲

まれた我が家のあたりに、ある日、工事車両が入って裏山を切り崩しました。そのような開発に眉をひそめる大人もいましたが、子どもの僕にはコンクリートで造成された宅地に2階建ての白い家が並び、東京から何人も転校生がやってきたことが印象的でした。小学生なりに、自分が暮らす小さな世界がもっと大きな世界とつながっていて、慣れ親しんだ小さな世界が変わっていくことを初めて感じました。

その後、経済学部に入っても GDP とか貿易赤字とか、見られない触れられないものは実感が湧かなかったのですが、たまたまイギリス経済史の先生に出会って勉強をして、僕が幼いころに経験したような都市化・郊外化（*2）を、19~20 世紀のイギリス社会が経験した重要な歴史的変化の一つとして研究する経済史家がいることを知ったのです。

僕の幼時体験の出口は時代や国・地域、言語を越えて、何十年も昔のイギリスにありました。現代の日本に暮らしながら昔の外国に思いを馳せるのは変態かもしれませんが、だからといって現代日本の常識だけに頼るのも十分に变態で、その出口が抽象的数理や歴史の世界につながっていることもあります。別の言い方をすれば、経済学には数多くの出口があり、どれか一つ気に入った出口に出合えば、それでいいと思います。それとも僕がたまたま地球の裏側で、ご同好の変態に出会ってしまっただけでしょうか（そうかもしれないですね、うーむ）。

2【郊外化】都心の人口が周辺に拡散する現象。19 世紀以降、鉄道・自動車など通勤手段の発達とともに郊外住宅地が開発され、人口が密集地から移動し生産活動と切り離された新しい社会を形成した。近年では生産活動も郊外に移転し、都心の空洞化（ドーナツ化）を招くこともある。